

『ダレカ』をさがす冒険

ぼうけん

あかはね  
赤羽じゅんこ



「息吹<sup>いぶき</sup>、まだ、決めてないの？」

図書室にいくと、同じクラスの図書委員の堀越<sup>ほりこし</sup>あかねがまっていた。それも目を  
つりあげたこわい顔で。

「だって、わかんねーもん。好きな本の紹介<sup>しょうかい</sup>なんてさ。堀越<sup>ほりこし</sup>は本、好きだろ？ お  
れのも書いてくれよ。たのむ」

手をあわせておがむポーズ。これでスルーできるときもある。

しかし、堀越<sup>ほりこし</sup>はますます目をつりあげ、声もとがらせた。

「やだ。自分のことは自分でやってよ。あと息吹<sup>いぶき</sup>だけなんだよ」

「うそー。みんな決めたの」

「うん。ほとんどその日に決めちゃった」

「みんな、本、好きなんだな」

「図書委員だもの、そうよ」

—

「へーっ」

おれみたいに本は読まないけど、しかたなくなつたつてのは、ほかにはいないらしい。

おれが図書委員になつたのは、しかえしをされたからだ。

委員決めるとき、おれは山根有樹を学級委員にすいせんした。山根は勉強ばっかりのまじめなやつ。黒くて大きなめがねがトレードマークで、マンガの主人公に似ているからと、コナンなんてよばれている。

一学期、同じ班のとき、宿題をうつさせてついたら、マジで怒つてきた。ゆうずうがきかないつていうか、ノリが悪いつていうか、おれとは話があわない。でも、なぜか大人うけはいいんだ。おれのかあさんは口ぐせのように、「山根くんを見習いなさい」というから、ちよつとむかつく。

山根は学級委員になるのをいやがつていた。人の前に出るのがにがてだからと。えんりよというより、本気でいやなようだった。

でも、話し合いを早く終わらせたいおれは、手をあげていったんだ。

「学級委員になつて、にがてなことに挑戦するのもいいと思います」

それがなぜか、バカうけ。「そのとおり」と拍手するやつもいて、山根はみごと選ばれた。

おれは給食委員かなにか、楽なものをやるつもりでいた。

けど、今度は山根がおれを図書委員にすいせんしたんだ。

「にがてなことに挑戦するのがいいつていうなら、長尾息吹くんが図書委員になるのがいいと思います。でなきや、ほくも学級委員、やりません」と。

いっしょの班だった山根は、おれが本を読まないことを、よく知っていた。

おとなしいやつがたまにいう言葉つて、力をもつ。クラスのほとんどが「そうだ、そうだ」と賛成し、おれは図書委員になつちまった。

図書委員は予想した以上に、仕事がいっぱいあった。

やぶれたり、よごれた本を見つけること。

返却されていない本を、さいそくすること。

あと本の整理だ。みんなかつてなところに本を置くので、もとにもどさないとい